英語が公用語であることの功罪

鈴木有理佳

「英語のできる日本人はsophisticatedなのさ」

これは、知り合いのフィリピン人どうしの会話のなかの日本人評である。訳せば、英語のできる日本人は高度な知識を持つ洗練された人々、とでもなろうか。その場にいた私に配慮したのかもしれないが、なぜか違和感を覚えた。日本に滞在したことのあるフィリピン人の大半は、日本が先進国なのに街中で英語が通じないことにとても驚く。あるフィリピン人研究者は、始めて日本に短期滞在したとき、「博士号まで持つ自分が幼児のように非力であった耐え難い体験」だったそうだ。英語を話せることは彼らのプライドでもある。

フィリピノ語（別名：タガログ語）とともに英語が公用語であるフィリピンでは、法律や行政命令などの公文書はすべて英語で起草され、発布される。また、英語を話す人口はアメリカ、インドに次いで世界三番目に多いとさえ言われ、ある程度の教育を受けている人々は互いに英語で議論をし、時にはジョークを飛ばし、合間にタガログ語で談笑する。自然なバイリンガルだ。多くのフィリピン人が海外就労者として世界中で活躍しているのも、英語を自由に話すからである。

しかし、英語の普及が真にこの国のためになっているのだろうかと思うことがある。というのも、英語は必ずしも全国民に均一に普及しているわけではなく、育ってきた環境や教育水準などによって理解度に大きな差があるからだ。そもそも英語の国かと思いきや、放送メディアはタガログ語中心である。英語ニュースはお金を払うケーブルでしか見られない。どう見ても、大衆の身近な言語は英語ではないのだ。そのような人々と、かたや英語の達者な人々との間に、何らかの溝が生じているような気がしてならない。

ある言語学者が指摘するに、フィリピンでは「英語を知らないことは、物事を知らないことに等しい」と無意識に思ってしまう風潮があるとか。つまり、英語を理解しない人を無知・無学であるとみなしてしまう傾向にあるらしい。そう言われてみると、冒頭に紹介したコメントはそんな意識が透けて見えやしないだろうか。そのような上から目線的な意識がある一方で、英語ができない人々は、英語を多用する同胞に対して「気取っている」「別世界の人」という感情を抱くようである。そのためか、フィリピン大統領の施政方針演説や一般向けスピーチはいつしかタガログ語中心になっている。そのほうが大衆に理解されやすく、彼らに親しみを感じさせるらしい。

英語の理解度の差は、以外にも国政をつかさどる議会でも話題になったりする。専門的な用語が多くなる法案審議では、語彙が少ないタガログ語よりも英語で議論が進められがちである。だが、その議論が理解できず、ついていけないとぼやく議員がたまにいるのだ。公用語とはいえども、英語は必ずしも同じレベルで理解しあえる共通言語ではない。

ちなみに、もうひとつの公用語であるタガログ語はどうか。そもそもフィリピンは多言語国家で、タガログ語はマニラ首都圏とその周辺地域で話される地方語にすぎない。そうした地域性に加えて、これまた育ってきた環境により、タガログ語の理解度にもやはり個人差があるようなのだ。フィリピン大学のある教授が上院選挙で落選したとき、「あの人はタガログ語が苦手だから」という噂がささやかれていたものだ。タガログ語の上手下手が話題になってしまう国なのである。

話しを英語に戻そう。昨今、フィリピンの教育界では英語での授業の是非が議論になっている。特に数学と理科だ。これらの教科では、その専門性から英語が使用されやすい。だが、家庭や地域で普段使用しない英語で教えても、子供達の理解の助けになっていないというのである。確かに、国際学力調査のランキングを見ても、フィリピンの順位はよろしくない。そのため、とくに初等教育低学年の子供達には彼らに身近でかつ思考の言語でもある母語、つまりはタガログ語や地方語で学んだほうがよいというのだ。実際に一部で検証もされているらしい。

英語を話せれば活躍の場が世界に広がり、フィリピン人個人にとっては有利であろう。しかしながら、英語の理解度に大きな差があり、英語の使用が子供達の学習にも影響を及ぼしているとするならば、国としては必ずしも有利ではないのではないか。もちろんフィリピンにしてみれば、英語の苦手な日本人にこんなこと言われても余計なお世話だろうけど。

すずきゆりか／アジア経済研究所　在マニラ海外研究員

専門はフィリピン経済。
現在は、フィリピン企業の投資行動を調査・研究している。